

オーラル・コミュニケーション I の授業実践報告

英語科教論 岡 真知子

1. はじめに

英語は世界で広く使用されている国際語であり、急速に国際化が進んでいる現代、英語の重要性はますます高まっているといえる。それゆえ、英語教育をめぐる議論も盛んで、課題も多い。

「何年も学校で英語を勉強しているのに、なぜ日本人は英語が話せないのか」、「TOEFL (Test of English as a Foreign Language, 英語を母語としない人の英語能力を測定する試験) で、なぜ日本はアジア30か国の中で下から2番目なのか」、「日本の英語教育は間違っているのではないか」などといった批判も耳にする。そうした状況の中で学習指導要領が改訂され、コミュニケーション重視の教育が打ち出された。コミュニケーション能力とは何をさすのか？それを高めるためにはどうすればいいのか？新学習指導要領においては、高等学校における英語科の科目のうち、「オーラル・コミュニケーション I」または「英語 I」が必修科目になった。

本校では、オーラル・コミュニケーション I を、一年次に1単位、二年次に1単位、計2単位履修することになっている。旧学習指導要領下では、オーラル・コミュニケーション A を2年次に1単位、3年次に1単位履修することにしてきたが、2003年度に新教育課程に移行してから、1年次と2年次にオーラル・コミュニケーションの授業を行うことにした。従来のオーラル・コミュニケーション A, B, C では、スピーキング、リスニング、リーディング、ライティングの4技能別の指導形態になっていたが、オーラル・コミュニケーション I, II では、リスニング、スピーキングの音声によるコミュニケーション活動の指導に重点を置くものの、4技能を区別することなく総合的に扱うレベル別の指導形態になった。本校でのオーラル・コミュニケーションの授業は、ALT (英語指導助手) の協力を得て、JTE (日本人英語教師) と ALT のティーム・ティーチング形式で毎時間の授業を進めている。ここでは、高等学校の英語教育において何をどう教えたらいいいのか、オーラル・コミュニケーション I の授業実践を通して考察してみたい。

2. 教科としての外国語 (英語) およびオーラル・コミュニケーション I の指導目標

「高等学校学習指導要領 外国語 (英語) (1999年3月29日、文部省告示により改訂、2003年4月より施行) によると、教科の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う」となっている。また、オーラル・コミュニケーション I の目標としては、「日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」と記されている。

つまり、学習指導要領が改訂されて、「実践的コミュニケーション能力の育成」が、ますます重要視されるようになった。学習指導要領によると、「実践的コミュニケーション能力」とは、「外

国語の音声や文字を使って実際にコミュニケーションを図ることができる能力」であり、改訂は「これからの国際社会に生きる日本人として、世界の人々と協調し、国際交流などを積極的に行っていけるような資質・能力の基礎を養う」という観点に立ったものである、と説明されている。

3. 本校生徒の現状

本校は各学年一クラスの小規模校であり、日本全国から生徒が集まってくる。出身中学は、国立、公立、私立とさまざまで、中学校時代に学習している内容も一様ではない。そこで英語科では、毎年、新入生に「英語学習についてのアンケート」(40ページ参照)を行っている。調査結果によると、中学校で筆記体の指導が義務づけられていないこともあって、筆記体が読める生徒は半数足らずで、発音記号が読めない生徒は6割を占める。ALTの授業を受けたことがあるかどうかについては、なんらかの形でALTと接触した経験がある者が多いが、定期的にALTの授業を受けていた生徒もいれば、月に一回とか、学期に一回、たまにしか受けなかったという生徒もいる。最も多いのは、週一回の授業を受けたという生徒で、クラスの約半数を占める。英語は好き、と答えた生徒は8割ほどいるが、高校入学段階ですでに苦手意識を持っている生徒もいる。中学時代の英語の学習時間については、実技の練習に時間をとられるせいか、あまり多いとはいえない結果になっている。このように、本校に入学してくる生徒は必ずしも同じスタート地点に立ってはおらず、入学直後の実力考査の結果からも言えることだが、英語の基礎学力において、かなりのばらつきがある。教える側としての一番の悩みは、クラスサイズのことを別にすれば、このような英語の学力差である。どこの高校でも大なり小なり差はあるだろうが、本校のような音楽高校の場合は、それが顕著に見られる。ただ本校の場合、夏季休業期間中などに海外でセミナーを受講したり、国内で外国人のレッスンを受けていたりする生徒も多く、英語学習の必要性は痛感しているようである。将来、国際的に活躍する音楽家になるためにも、英語の学習は不可欠であり、その点では学習の動機づけができていけるといえるだろう。

4. 授業計画

オーラル・コミュニケーションⅠの授業では、「実践的コミュニケーション能力の育成」を図るため、例年、生徒のスピーチを授業に取り入れている。これは自分の考えや情報などを聞き手にわかりやすく伝えることを目的にしたコミュニケーション活動であり、年度当初に授業計画を立て、どの生徒も一年間に一回は発表できるよう、年間20時間余り(定期試験の時間は除く)の授業の中で、毎時間2～3名の生徒の発表を組み込んでいる。原則的に一年次は単独で発表させ、二年次になると、単独または2～3名のグループで発表させている。一年次では、自己紹介かShow and Tellを課し、二年次では、日本文化の紹介や体験発表など、自由にトピックを選ばせている。また発表を聞く生徒には、後に述べるような評価シートを配布して記入させ、授業に参加できるような工夫をしている。

5. 授業内容

各時間のおおまかな Teaching Procedure は次のようになっている。

Procedure	Students' Activities	time
1. Greetings and roll call	Greet in English	2min
2. Questions and Answers	Answer in English	3min
3. Speech/Presentation	Speech/Listen and fill in the evaluation sheets	20min
4. Textbook	Reading, Listening, Speaking, Writing, etc.	25min

このうち、4. の教科書を使用した場合の Teaching Procedure の一例を示すと、次のようになる。

4. Textbook (Sailing 啓林館, Lesson 8, 2nd period) (1) Review • Choral reading • Questions and Answers (2) Presentation of the new material • Oral introduction of the new words and phrases • Pair work • Presentations of two groups • Listening and writing practice • Sound practice (3) Supplementary explanation in Japanese (4) Consolidation (*教科書を使用した場合の生徒の活動については、本文中に記す)	25min
---	-------

2. の Questions and Answers は、学校行事などに関連したものや、時事問題、社会的なトピックなどを適宜取り上げ、ALT に 2～3 人の生徒に質問をしてもらい、たとえば、修学旅行のあとであれば、

Q 1. How many days did you go to the school excursion ?

Q 2. What place did you like most ?

などの簡単な質問をしてもらい、いわゆる Warm-up を行う。

そのあとスピーチに移るが、一年次で行う場合は、自己紹介のポイントや Show and Tell のやり方を JTE が説明する。年度の最初に生徒に渡すプリントは次のようなものである。

①自己紹介について

名前、専攻、出身地、趣味、家族などについて、一人 3 分～5 分くらいで発表する。日本文化の紹介などを含めてもよいし、楽器演奏をまじえてもよい。

② Show and Tell について

大切にしている物や思い出のある物を持ってきて、それを皆に見せながら、それについての説

明をする。

<注意事項>

1. 一人3分～5分
2. 持ってきて見せるものは、皆によく見えるよう、筆箱より大きなものとする。
(普通サイズの写真は小さすぎるので不可。あまりに日常的な物も不可)
持ってこれないような大きな物、または小さな物については、黒板に絵を描いてもよい。
3. 原稿はなるべく見ないで話せるように準備しておく。
4. 聞いている生徒は評価シートに評価を記入する。

<例>

1. クラブ活動等の賞状・賞品を持ってきて、その時の苦勞を話す。
2. プレゼントとしてもらった品物、趣味の品物などを持ってきて話す。
3. 好きな音楽のCD、絵やポスターなどを持ってきて話す。
4. 将来の夢に関する物を持ってきて話す。

<原稿作成上のポイント>

1. 最初に簡単な挨拶を入れ、名前を言う。最後に Thank you.
2. これから何を話すか言ってから始めるとわかりやすい。
3. 具体例をできるだけ示したり、聞いている人に語りかける工夫をするとわかりやすい。

上記のようなプリントを配布したあと、スピーチを行う際の留意点を ALT から説明してもらおう。それは、① Don't forget eye contact. (アイコンタクトを忘れないこと)。② Speak loudly and clearly. (はっきりと大きな声でしゃべること)。③ Try to remember, not to read. (原稿を棒読みするのではなく、できるだけ暗記してしゃべること) である。スピーチを終えたあとに、ALT が Speaker やそれ以外の生徒たちに質問をし、生徒たちはその質問に答える。そのあと、Speaker 以外の生徒は、次のような Evaluation Sheet に評価を記入する。

Speaker ()		Topic ()			
Voice	excellent	very good	good	fair	poor
Eye contact	excellent	very good	good	fair	poor
Content	excellent	very good	good	fair	poor
Comment					
Name ()					

(1)スピーチの実践例

ここで実際に生徒が行ったスピーチを紹介してみたい。

(ア)生徒 A の英文原稿 (*原文のまま)

“My Ocarina”

Hi, everyone !!

Today, I will talk about my ocarina.

Do you know what ocarina is ?

This is the ocarina I made 7 years ago when I was a 3rd grade elementary school student.

Ocarina is a musical wind-instrument which is made of clay. The root of this instrument is away back to over 3 centuries before Christ. Ancient people made small whistles shaped like birds or animals from clay. And, in the 19th century, an Italian man changed the old instrument to this new shaped instrument which has 7 notes.

And it was named “ocarina” after its shape.

“Ocarina” means “A small goose”.

Now, I'll tell you about how I made this ocarina. These are the tools I used.

First, make a triangle shape with clay and cut it into 2 pieces using a string. Then dig out the inside.

Put the pallet in to make the air way.

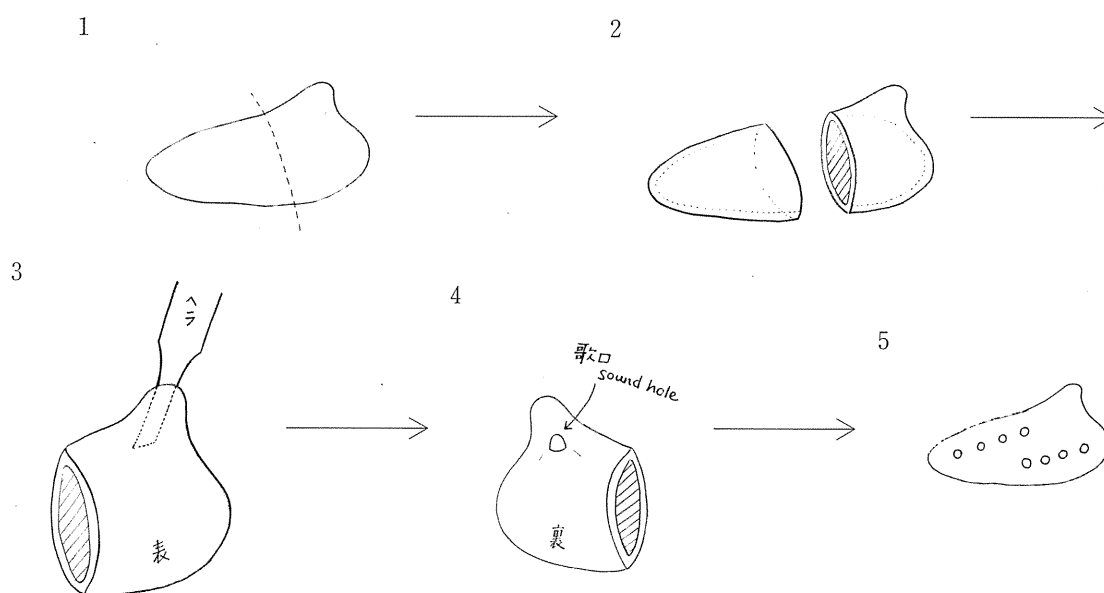
Then make the sound hole. This is the most difficult part and if you make this process perfect, you can make a beautiful sound !

Put the 2 pieces together and make 10 finger holes. And at last make it dry and bake it.

First, I couldn't make a single sound. Making an instrument is so difficult. But I tried and tried and made more than 10 ocarinas. This is the best one. The key is not exactly correct but I like my ocarina so much. This is my treasure.

Now let me play the ocarina. Please enjoy.

Thank you.



このように、この生徒はオカリナの由来について話したあと、上のようなイラストを見せながらオカリナの作り方を説明し、自分で作ったオカリナの演奏でスピーチをしめくくった。

この生徒のスピーチに対して、他の生徒たちはこうコメントしている。

「演奏まで聞けて素晴らしかった。きれいな音色だった」、「内容もわかりやすく、はきはきしててすごくよかった。オカリナの音っていいなあと思いました」

生徒たちの評価は、Voice, Eye contact, Content のいずれに対しても圧倒的に excellent が多く、深い感銘を受けたようだった。ALT のコメントは、“Very entertaining” “Good delivery”

となっていて、高い評価を与えていた。

(イ)生徒 B の英文原稿 (*原文のまま)

“English Life”

Two years ago, I was living in Finchley, which is north part of London. In England, each road has name and houses have numbers instead of nameplates. My house which I used to live in is called 22 Village Road. It was semi-detached house and our next door neighbour was also musician by chance. There were 44 houses in a circle on the Village Road.

In June of that year, they celebrated their Queen's Jubilee. It meant Queen Elizabeth has been on the throne for 50 years. There were a lot of festivals and parties throughout the U.K..

On 3rd of June, we celebrated the Jubilee together all the Village Road residents in an open space which extend in front of our house. We brought a lot of foods, cakes, drinks and shared them. Children enjoyed face-painting and trampoline. At last, we played a tug of war between north side versus south side. As a result, our south side won.

My grandma came to London then and she attended the party. An old woman asked us “Do you know this song ?” as soon as she noticed we were Japanese. She sang a Japanese song, but my parents and I didn't understand at all except my grandma. She started to sing with the old woman. Then we realized that it was a Japanese war song. I was very surprised.

At night, my parents and I gave a concert at one of the residents' house. Their house and garden are very big. Many audience came to the concert and some of them couldn't come in. I felt everyone enjoyed. Some audience was shedding tears. I was so glad and it was an emotional experience for me.

In the U.K. there are preservation where they are not allowed to change their houses seem to be modern by law. Older houses are more expensive and popular than new one. They usually have garden and love gardening. I enjoyed beautiful flowers and birds singing every day. I think it is a great thing.

I guess for English people, classical music is closer than for Japanese. They enjoy playing the musical instruments from a young age so they are interested in listening to classical music.

In the future, I would like to study in London. I think it is a great place to study music and it is important to exchange ideas, live there, eat food and speak their languages. I am sure it would be really help.

There are a lot of museums and buildings in London. There is so much nature outside of London. I hope you have a chance to visit England. Thank you.

この生徒は一年間イギリスに滞在した経験をもとにスピーチをしてくれた。スピーチを聞いていた生徒にとっても異文化を理解する上で大いに役立つ内容だった。このスピーチのあとでは、他の生徒の理解を深めるために、“Queen's Jubilee” とか “a tug of war” などの語句についての

説明を ALT と JTE とが行った。

この他に、“My favorite artist” というタイトルで、あるミュージシャンの魅力を語って CD をかけて説明をしたり、“What I learned from Hiroshima” というタイトルで、広島で平和について学んだ体験をビデオを見せながら語ったり、一人が手話をし、もう一人が英語でスピーチをして、ペアでプレゼンテーションをした例などもあった。また別のグループは、“Who am I?” というタイトルで「滝廉太郎」に関するクイズを英語で出題し、その後、滝廉太郎が作曲した「荒城の月」の英語版 “A Thousand Moons Ago” や日本古謡 “Sakura Sakura” の歌詞をクラスに配り、全員で英語の歌を合唱したこともあった。また夏休みに東北を旅行したあるグループは、ねぶた祭りや三内丸山遺跡をビデオに収録し、それを編集して、英語でその説明をし、日本文化についての紹介を行った。このように本校の生徒たちは、自分を表現することについてはとても意欲的で、それぞれの生徒が創意工夫をこらし、音楽高校ならではの、楽器の演奏や独唱、合唱をまじえてのプレゼンテーションを楽しみながら行っている。

(2)教科書を使用した実践例

次に、教科書 Sailing (Oral Communication I 啓林館) を使用した授業の実践例を紹介しておきたい。Lesson 8 I'm Not Feeling Well の 2 時間目の授業を次のように展開した。

(1) Review

- Choral reading (Repeat the sentences after ALT)

Key Expressions (p63)

1. “Are you feeling all right?”
“No, I'm not feeling well.”
2. I have a slight headache.
3. What did you do to your leg?
4. You should go and see a doctor.
5. I wouldn't if I were you.
6. It might be helpful to have some hot chicken soup.

- Explanation about the subjunctive mood (NO. 5) using some examples.

- Questions and Answers.

How are you feeling?

Do you have a cold?

Do you have a good appetite?

(2) Presentation of the new material (p64~p67)

- Oral introduction of the new words and phrases

“Bless you.” “feel chilly” “Take good care of yourself” “left-handed”

Let the students listen to the two different dialogues and answer the questions.

Let the students listen to the questions and find the correct answers.

- Pair work

Let the students practice the dialogues in pairs, substituting their ideas for [] parts.

① A : Are you feeling all right? You don't look well.

B : I'm not feeling well. I have [a toothache].

A : Oh that's too bad. You should [go and see a dentist].

② A : What did you do to your [leg]?

B : I broke it while I was [playing tennis].

- Presentation of two pairs (let them make presentations using the dialogues above).
- Listening and writing practice, pair work

Let the students listen to the conversation between Ken and a doctor, and answer the questions.

Let the students write down the symptoms Ken is complaining of.

Let the students practice the dialogues in pairs, substituting their ideas for [].

Doctor : What seems to be the problem ?

Patient A : I have [a bad cough].

Doctor : Do you have [a fever]?

Patient A : [Yes, I do].

Doctor : Does your [stomach] hurt ?

Patient A : [No, but] I have a slight pain in my [back].

Doctor : Hmm...I think you have the flu. [Stay in bed and drink a lot of water].

- Sound practice

Let the students put a slur mark where the words are linked together. Indicated in the parentheses is the number of the marks required for each sentences.

- 1) I have a sore throat and a fever. (3)
- 2) A friend in need is a friend indeed. (4)
- 3) An important game is scheduled for the weekend. (2)
- 4) What I need is a lot of rest. (4)
- 5) All work and no play makes Jack a dull boy. (2)

Let the students listen to English sentences and fill in the blanks.

When you're _____,

When _____ the street,

_____ falls so hard,

I will comfort you.

Oh, when darkness comes

And pain _____,

_____ troubled water,

I will lay me down.

(3) Supplementary explanation in Japanese

注意すべき語法, 文法事項などを日本語で説明する。たとえば, 本課であれば, Key Expressions に出てきた仮定法過去の文を説明し, 例文を挙げるとか, diarrhea, sprained, headache,

stomachache, toothache などの単語の意味の確認や用法を日本語で説明する。

(4) Consolidation

Drill the important usages and expressions.

(3) その他の活動

上記のような活動の他に、ときどき他のコミュニケーション活動を取り入れている。その一つは、藤井昌子／イヴァン・バーケル共著『言語活動成功事例集』（開隆堂、1998年）に掲載されている活動で、これまでに Word-chain Relay や Jeopardy を行った。Word-chain Relay は、「しりとり形式で単語力を競う活動。できるだけ多くの単語を正確に書いたチームが勝ちとなる」¹⁾のもので、最初に与える単語を、たとえば名詞、動詞などと指定して制限時間内で列ごとに競い合った。各列の代表生徒が黒板に書いた単語を ALT がチェックし、どの列が最も多く正しい単語を書いたかを調べ、順位をつけた。この活動においては、生徒たちは競争意識を燃やしながらか熱心に取り組み、楽しみながら語彙力をつけるのに役立った。これ以外に、“Omit One Game” という、種類の違う単語をみつけるゲームも行った。それを実施する前には、ALT に次のような指示を英語で与えてもらった。[I'm going to say four English words. Three words belong to the same category or group, but one word is different from the other three words. Listen carefully and find out which word is different (or should be omitted) and why you think the word is different from the other three.]

たとえば、jogging, soccer, volleyball, basketball では、Jogging is different because the others are ball-games. となる。

これらの活動以外にも、生徒の興味を引きそうなトピックを英字新聞の記事から選び出し、音読指導や内容把握の指導を行った。英字新聞を利用することについては、『日本人はなぜ英語ができないか』（岩波新書、1999年）の中で鈴木孝夫氏も、「英字新聞を利用すれば、会話力はもちろん、一般的な英語発信能力を高めるのに非常に役立ちます」と述べている。

6. 評価について

新指導要領下での教科目標である「実践的コミュニケーション能力」をどう評価するかは大きな課題であり、『英語教育 6月号』（大修館、2002年）も「新しい評価をどうするか」として特集を組んでいる。その6ページには、「教育目標と評価のあり方はきわめて密接に関係しており、教育目標が変われば、これに適合する評価の方法も変わらなければならない」という趣旨のことが述べられている。同誌の著者の一人である鈴木秀幸氏は、「パフォーマンス評価 (performance assessment)」の導入が必要だと主張している。そして「パフォーマンス評価とは、評価しようとする能力や技能を、そのような能力を実際に使ってみなければならぬような課題や問題を生徒に課して、評価していこうとすることである」と説明している²⁾。

本校の場合、オーラル・コミュニケーション I の評価は、前期、後期に一回ずつ行われる定期試験のペーパーテストの成績と、スピーチの点数、授業への取り組み姿勢、出席状況などを総合的に判断してつけている。ペーパーテストは、教科書で習った内容を中心にした英問英答、Dictation、発音やアクセントの問題、加えて ALT が準備したやや長めの英文を聞いて質問に答える問題、授業中に行ったゲーム (Word-chain Relay) などを応用した問題からなる。スピーチの評価は難しく、『Step 英語情報 2002. 11・12号』（財団法人日本英語検定協会、2002年）の「スピーキング能力の評価の基本」で、和田 稔氏は、「スピーキング能力の評価に『観察』による評価の

重要性が強調されている」, あいまいな評価を避けるためには, 「活動(タスク)の特徴を厳密に分析する必要がある」と述べている。本校の場合, 生徒が行うスピーチは, 事前に評価のポイントを説明した上で, 上記のような評価シートを用いて行っている。そしてスピーチについてのALTの英語の質問に, 発表をした生徒がスムーズに答えられるかどうか評価の対象にしている。また教科書を使用しているペアワークやグループワークの際には, ALTやJTEが机間巡視をして生徒たちの活動を観察している。

7. まとめ

本校では, 前述したように, オーラル・コミュニケーションの授業は, 毎時間, ネイティブ・スピーカーであるALTと日本人英語教師(JTE)とのチーム・ティーチングを行っている。土屋澄男/広野威志著『新英語科教育法入門』によると, ネイティブ・スピーカーの役割としては, 次の三つがあるという。(1)自然な英語の提供者である。(2)英語文化の体現者である。(3)外国人との直接的コミュニケーションを体験させてくれる。

本校の場合は, クラス単位でオーラル・コミュニケーションの授業を行っているため, ALTと生徒一人一人との会話の時間が限られるが, できるだけ多くの生徒が英語をしゃべる機会がもてるよう努力している。また, 学期に何回かはネイティブ・スピーカーに自国の文化や風習について英語で紹介してもらっている。これまでも, ニュージーランドの地理, 歴史, 文化, 日本とニュージーランドとの休日の違い, 女性参政権についての話などをしていただき, 異文化理解に役立った。

授業の指導案は, JTEが作成し, 事前に綿密な打ち合わせを行っている。その指導案をもとに, 実際の授業においてはネイティブ・スピーカーができるだけ多く活躍できるようにし, JTEは日本語による補足説明が必要な場合のみ日本語を話し, それ以外では生徒もJTEも英語のみを話すように心がけている。

日本人はshyで, 積極的に英語を話そうとしない, ということをよく耳にするが, 本校の生徒の場合, もちろん個人差もあるが, ネイティブ・スピーカーの英語を聞いて理解しようとしたり, 英語で話したりすることに対して, 積極的な態度が見られる。生徒たちは講義形式の授業を受動的に聞くよりも, プレゼンテーションをしたり, ペアワークやグループワークで自分たちが参加できる活動をするこのほうに意欲的に取り組む傾向が見られる。生徒が活躍できる場を多く作ったほうが, オーラル・コミュニケーションの授業では学習効果が上がるようである。

8. 今後の課題

オーラル・コミュニケーションの授業のみならず, すべての英語教育が成功するか否かは, 教育的環境が整っているかどうか大きく左右される。現在, 中学校の英語の時間数は, 年間105時間(週当たり3時間=150分)を標準とすることになっているが, 実際は学校行事その他でつぶれ, 十分な時間が英語の授業にあてられているとは言えない状況になっている。『英語教育』別冊「世界25か国の外国語教育」(大修館書店, 1999年3月)によると, 国別の週当たりの英語の時間(分)(義務教育最終学年)でもっとも多いのはハンガリーで225分, フランス180分, イタリア180分となっており, 日本は主要12か国のなかで下から二番目に授業時間が少ない。そういうこともあってか, 高校に入学した段階で, 十分な基礎力がついていない生徒もいる。本校の場合, 帰国子女もいれば, 中学校で学ぶべき基本的な事項が身につけていない生徒もいて, 学力差が大きい。そういう生徒たちの個々の力をどうやって伸ばしていくのかが一つの大きな課題である。

またクラスサイズの問題もある。前述の『新英語科教育法入門』には、「外国語教育の専門家の多くは、コミュニケーション能力の育成には20人以上の学級では効果が期待できないという見方で一致している。日本外国語教育改善協議会は、『外国語授業における1学級の生徒数は15名を限度とすること』というアピールを行っている。欧米ではこのことがほぼ常識となっていることからみて、日本がこの点で後進国であることは間違いない」という見解が述べられている³⁾。クラスサイズの問題については、イギリスの大学で教鞭をとっていたマークス寿子氏も『爆弾的英語教育改革論』(草思社、1995年)の中で「日本のような40人、50人のクラスでは、英語の教育は絶対にできない、といっても言いすぎではない」と述べているし、前述の鈴木孝夫氏も同様の見解を示されている⁴⁾。実際に授業をしてみて、40名を越える人数のクラスでなく、せめて20名くらいであればもっといろいろな活動ができるのにと残念に思うことがよくある。一クラスに40名余りもいれば、ALTと生徒一人一人が会話をする機会や生徒の発音や読みをチェックする機会も限られ、定期試験もペーパーテストに頼らざるをえなくなる。クラスサイズの問題は、本校だけでなく日本の多くの学校が抱えている問題であるが、教育予算の問題はあるにせよ、英語科の教員としては何とか改善を望みたいものである。

こういう問題を抱えながらも、現実には高校の英語教育において何が可能なのか、いかにすれば学習効果が上がるのかを常に追求しなければならない。将来、さまざまな国籍の音楽家たちと接する機会があると思われる本校の生徒たちにとって、どういふ英語教育が望ましいのか? 『異文化をこえる英語』(丸善ライブラリー、1996年)で、著者鳥飼玖美子氏は、「読むことがすべての出発点だ」と述べ、本当に相手とコミュニケーションをしようと思えば、挨拶とか買い物などができるだけではだめで、「読むことによって身につけた、厚みのある英語がどうしても欠かせない……学校の英語教育の使命は、基礎を作ることにある……また母国語教育をおろそかにしては、国際的な人材は育たない」と述べている。前述のマークス寿子氏も、『爆弾的英語教育改革論』の中で、「読み」の大切さと日本語教育の大切さを説いているし、2004年12月9日付の朝日新聞の社説も、「いまこそ日本語を」と題して、日本語教育の大切さを力説している。世界41の国と地域の15歳の生徒を対象に経済協力開発機構(OECD)が行った試験で、日本の子どもの読解力が大幅に低下したという結果が出たからである。明治大学教授で英語に関する著書も数多く執筆しているマーク・ピーターセン氏は、『英語の壁』(文春新書、2003年)の中で、「中・高で簡単な会話を中心とする授業が増えたせいも、英文がますます読めなくなっている」と警鐘を鳴らし、『ニホン語、話せますか』(新潮社、2004年)の中で、中学校で使用されている7社の英語教科書を見ると、「簡単な会話が中心となり、readingの練習は際立って少ない」のは遺憾だと述べている。最近の中学校や高等学校の教科書が、会話中心になってきたのは、実用的な英語を身につけさせる、という意図によるものであろうが、確かに以前よりも「読む」ことが軽視されているように思える。読解力がなければ、日本語の文章も英語の文章も理解できず、深く考えて表現することなどできない。外国人と流暢にしゃべれたからといって、またTOEFLやTOEICのスコアがいいからといって、必ずしもコミュニケーション能力が高いとはいえないだろう。いくら英語の運用能力を身につけたとしても、英語で話す内容が身のあるものでなければ、真のコミュニケーションは成り立たない。それゆえ、英語の運用能力を身につけることはもとより、高校時代には幅広い知識や教養を身につけ、広い視野をもち、異文化を理解しようという開かれた心をもつよう指導することが大切なのではないだろうか。

英語学習についてのアンケート

1. 中学時代に使用していた教科書は
a. Sunshine b. New Horizon c. New Crown d. Total e. One World
f. その他 _____
2. 筆記体について
a. 筆記体が読める b. 筆記体を書ける c. 筆記体の読み書きはできない
3. 発音記号について
a. 発音記号が読める b. 読めない
4. 英和辞典について
a. 中学時代に英和辞典を引いたことがある b. 英和辞典は引いたことがない。

現在持っている英和辞典名 _____

〃 和英辞典名 _____

5. ALTについて
a. 中学時代に ALT の授業を受けたことがある。 週 _____ 回
b. _____ がない。
6. 海外留学&海外旅行の経験について
a. これまでに海外へ行ったことがある。 国名 _____ 期間 _____
b. なし
7. 英語について
a. 英語は好き
b. 英語は嫌い。 その理由 _____
8. 英語の取得資格について
a. 英検 _____ 級 b. その他 TOEFL など _____ 点
9. 中学時代の一日の学習時間
家庭学習の時間 _____ 時間, そのうち英語は _____ 時間

1年 _____ 番 _____

参考文献

- 土屋澄男／広野威志著『新英語科教育法入門』（研究社，2000年）
鳥飼玖美子著『異文化をこえる英語』（丸善ライブラリー，1996年）
鈴木孝夫著『日本人はなぜ英語ができないか』（岩波新書，1999年）
マークス寿子著『爆弾的英語改革論』（草思社，1995年）
マーク・ピーターセン著『英語の壁』（文春新書，2003年）
マーク・ピーターセン著『ニホン語，話せますか』（新潮社，2004年）
『英語教育』別冊（大修館書店，1999年）
『英語教育 6月号』（大修館書店，2002年）
藤井昌子／イヴァン・バーケル共著『言語活動成功事例集』（開隆堂，1998年）
『STEP 英語情報 2002 11・12月号』（財団法人日本英語検定協会 2002年）
『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』（文部省，1999年12月）
『Oral Communication I Sailing』（啓林館，2002年）

注

- 1) 『言語活動成功事例集』 p.20
- 2) 『英語教育 6月号』 p.9
- 3) 『新英語科教育法入門』 p.22
- 4) 『日本人はなぜ英語ができないか』 p.127